令和３年10月28日（木曜日）

被害と復興 現地で体感

盛岡二高1年生が震災学習 高田松原を守る会の講話も

陸前高田で

盛岡市の県立盛岡第二高校（小原貴人校長）の1年生167人は26日、陸前高田市気仙町の高田松原津波復興祈念公園内の東日本大震災津波伝承館などを訪れ、震災学習を行った。生徒たちが展示見学などを通じて、津波が残した爪痕や当時の様子に理解を深めたほか、津波で流失した国の名勝・高田松原の再生に向けて尽力するNPO法人・高田松原を守る会（鈴木善久理事長）の講話も聞き、復興へと進み続ける人々の熱意にも触れた。

同校では、平成30年度から1年生が同市を訪れ、震災学習を行っており、その一環として、高田松原の草取りなどの奉仕活動や植樹作業にも協力している。

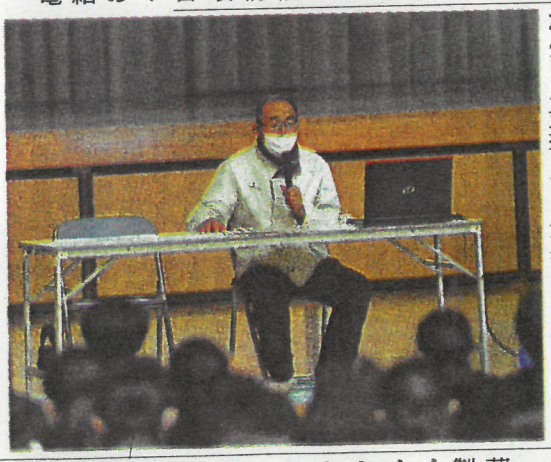
同日は、津波伝承館や奇跡の一本松を見学後、高田松原での奉仕活動を予定していたが、悪天候のため予定を変更し、高田町の市総合交流センター・夢アリーナたかたで、同法人から高田松原についての講話を受けた。

同法人は、震災前から高田松原の環境保全活動を推進。震災後は、大津波で失われた「白砂青松の高田松原」再生を掲げ、マツの植栽、草刈り、海浜植物の保護・育成などに取り組んでおり、この日は鈴木理事長（76）が松原がつくられた経緯や震災前のにぎわいの様子、震災後の活動について説明した。

この中で、同法人として実施したマツ苗の植樹作業について、今年5月の植樹会で目標としていた1万本の植樹を完了したと紹介。鈴木理事長は、地元の高校生や盛岡二高の生徒たちなど、多くの人の力を借りて達成できたとし、「支援してくださった関係者に感謝している」と述べた。

植樹後は、ボランティアの協力を得ながら除草作業に奔走し、週1回のペースで草刈りを行っている現状を説明。鈴木理事長は「震災前のような美しい高田松原になるには、50年かかると言われている。今後も、県や市、支援をくださる企業、団体、学校、ボランティアの方々と力を合わせて、高田松原の再生を目指す」と決意を伝えた。

講話後には、同校の華道部や生徒有志が製作した「花ろうそく」の寄贈も。藤原さくらさんと小倉璃々花さんは「伝承館の見学や講話を聞いて、地震などの災害が起きた時には、『自分は大丈夫』と思わずに、すぐ逃げることが大切だと感じた」「マツが流されても、ずっと昔からつないできた伝統を途絶えさせないように活動する皆さんの姿勢や熱意が素晴らしいと思った」とそれぞれ話していた。



生徒たちに高田松原の歴史や現在の様子を紹介した鈴木理事長（電子新聞に別写真あり）

この記事は東海新報社の許諾を得て転載しています。

（東海新報）